

教育実践部門

自らかかわり、学ぶ子どもを目指して ～「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」の授業づくりを通して～

新潟市立葛塚東小学校 井上 拓哉（平成24年度）

1 主題設定の理由と研究の背景

外国語科・外国語活動では、児童一人一人が自分の伝えたいことを熟考し、他者と伝え合う学習が中心となることから、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」は容易に実現しやすそうな印象を受ける。しかし、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を目指した授業を構想する際、多くの場合、日々の学習が「よく分かる」「だいたいよく分かる」児童を対象にして考えがちではないだろうか。

文部科学省サポートマガジン「みるみる」によると、教師主導の一斉授業では、「勉強が難しい」と感じている児童が、26.5%存在している。当校も同様、またはそれ以上であるかもしれないと感じている。

このような児童には、次のような課題が見られる。

- 自分が伝えたいことを考える場面（個別学習場面）で、何を伝えればよいか分からない・決められない。
- 自分の表現を吟味し新しい気付きを得るためにかかわる場面（協働学習場面）で、誰とかわればよいか、何を話せばよいのかが分からない。

勉強が簡単すぎる	23.2%
中間層	50.3%
勉強が難しい	26.5%

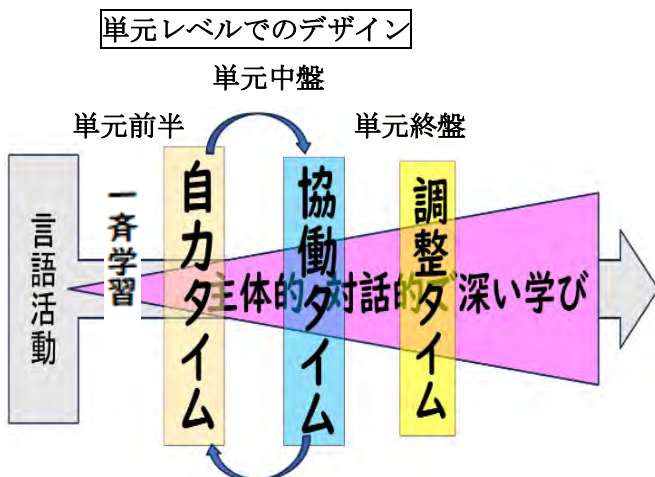
本実践は、このような外国語の学習が難しいと感じている児童にこそしっかりと寄り添い、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を図り、自らかかわり、学ぶ子どもを目指して、本実践に取り組んだ。

2 目指す子どもの姿と手立て

外国語の学習が難しいと感じている児童に、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図る「単元デザイン」と「当該児童の意欲を喚起する働き掛け」を行うことで、自らかかわり、学ぶ子どもを目指す。

手立て1： 個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図る「単元デザイン」

児童が自らの学びを調整し、深めるための枠組みとして、各単元において「自力タイム（個別学習）」「協働タイム（協働学習）」「調整タイム」という学習場面を取り入れた。



【自力タイム】何を何をどう伝えるか自己決定する場。児童一人ひとりが新しい表現を試したり、自分の考えを整理したりする。

【協働タイム】赤白帽子の活用や協働シートで学びを広げたり、深めたりする。互いに教え合ったり、情報交換をしたりしながら課題解決する。

【調整タイム】最後の言語活動の前には、何ができて、何が課題か、なぜそうなったのかを振り返り、自分の学びを調整しながら次の単元への学びへつなぐ。

単元前半：一斉学習で表現を導入した後、自力タイムで、児童一人ひとりが新しい表現を練習したり、自分の考えを整理したりする。

単元中盤：協働タイムを通して、自分の表現を他者に伝え合い、互いの表現を吟味し、新しい気付きを得る。この気付きを基に、協働タイム内でも自力的に表現を修正・再構築することで、「個別学習と協働学習の往還」が生まれる。この往還を繰り返すことで、学びを深めていく。

単元終盤：調整タイムを設け、学びの成果や課題を整理し、本単元の最後の言語活動への見通しを立てるだけでなく、次の単元での学びにもつなげる。

手立て2：当該児童の意欲を喚起する働き掛け

昨年度、5年生の外国語科で「自力タイム」「協働タイム」「調整タイム」という「単元デザイン」を導入した。この試みにより、学びのプロセスへの意識は高まったものの、特に学習に苦手意識をもつ児童において、「単元デザイン」だけでは解決できない二点の課題が顕在化した。

① 「何を伝えたらよいか分からない・決められない」（個別学習場面）

：自力タイムで発話内容を自己決定できず、立ち止まる。

② 「他者とどのようにかかわって学べばよいか分からない」（協働学習場面）

：協働タイムの目的が曖昧で、主体的な「協働」に至らず、活動が一部の児童に頼りがちになる。

② 「他者とどのようにかかわって学べばよいか分からない」（協働学習場面）

：協働タイムで役割が曖昧で、主体的な「協働」に至らず、活動が一部の児童に頼りがちになる。

そこで本実践では、「単元デザイン」に加えて、「勉強が難しい」と感じている児童に対してより具体的な手立てを打つこととした。

① **自己決定を促す「選択カード」**（自力タイム）

「何を伝えたらよいか分からない・決められない」児童に、選択肢が記載されているカードを用意し、児童に引かせる。児童は、カードを引く楽しさを感じるとともに、自ら引いたことで、その内容を伝えようとする。



② **② 主体的な意欲を喚起するための「赤白帽子」の活用**（協働タイム）

「勉強が難しい」と感じる児童と「勉強が簡単すぎる」と感じる児童をペアにすると、往々にして「教え・教えられる関係性」ができてしまい、「勉強が難しい」と感じている児童の主体性をさらに奪ってしまうことになりかねない。そこで、赤白帽子を導入することで、「帽子なし：まだ考えが決まっていない」、「白帽子：考えが決まったが自信がない」、「赤帽子：自信のある考えがもてた」の3段階を視覚的に分かるようにした。帽子なし児童同士で検討することで、互いに「考えが未完成」な状態を共有するため、「一緒に考えを創り出す」という主体的な立場へ転換し、自己決定する場を保障することができる。

帽子の色で児童の英語に対する「自信」レベルを可視化



③ **「赤白帽子」の活用を段階的に変化させる**（自力タイム→協働タイム）

赤白帽子の色を活用して、協働相手とのペアリングを段階的に変化させる。②のとおり、初めは「同じ色の帽子同士」でペアを組ませ、安心して発話できる環境を作る。慣れてきたら、「違う色の帽子同士」で組ませることで、自信のある子がそうでない子をサポートしたり、互いの学びを補完し合ったりする関係性を自然と促す。②で主体的に学習する姿勢が芽生え始めているため、友達からの学びや気付きを受け入れやすくなっている。最終的には、「完全ランダム」でクラスの誰とでも自由に好きな色を尋ねたり答えたりできるよう、段階的に交流の幅を広げていく。

3 授業の実際

◆ 実践1：第3学年 Let's try! 1 Unit 4 「I like blue.」

- 単元のねらい：色に関する表現について、自分の好きな色を伝え合う活動を通して、コミュニケーションの楽しさを味わうことができる。
- 単元で扱う言語活動
 - ◆言語活動①（2時間目）：「I like ○○○.」と自分の好きな色を発話する。
 - ◆言語活動②（3時間目）：「Do you like ○○○?」などと友達と好きな色を尋ね合う。
 - ◆言語活動③（4時間目）：自分と好きな色が同じ友達を見付けるために、学級の友達と伝え合う。

<具体的なやりとり例>

A: Hello! Do you like red?

B: No, I don't. I like blue. Do you like blue?

A: Yes, I do! Me, too!

B: Oh, you like blue, too!

(1) 手立て1：個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図る「単元デザイン」

1時間目	一斉学習で表現を導入 (I like / What do you like?)	
2時間目	個別学習で自分の好みをカードに書く (自力タイム)	目指す言語活動例：① (個別最適な準備)
3時間目	好きなものについて質問・情報収集・課題解決する活動 (協働タイム) 協働シート使用	目指す言語活動例：② (往還の実践と深化)
4時間目	友達とのやりとりを振り返る (調整タイム)	目指す言語活動例：③ (協働の深化/自己調整)

本単元では、「自力タイム」(2時間目)で準備した内容(①)を、「協働タイム」(3時間目)で伝え合い(②)、その場で得られた気づきを基に発話や表現を修正・再構築することで、「個別学習と協働学習との往還」が生まれる。その成果が、最終的な調整タイム(4時間目)での振り返り(③)に繋がる。

実践1 Unit 4 「I like blue.」

この単元では、「自分の好きなものを英語で伝える」ことを目標とした。導入では、色や食べ物など身近な語彙を視覚的に示しながら、「I like ~.」の表現を繰り返し練習した。「自力タイム」では、児童が自分の「好きなものカード」を使い、「何を言いたいかな」を自分で決めて音読練習を行った。教師は個々の児童に声をかけながら、「自分の言葉で伝えられた!」という成功体験を積めるよう支援した。

「協働タイム」では、ペアやグループでカードを見せ合いながら、「What color do you like?」「I like red.」などのやり取りを行った。児童は友達の発話を聞き取り、まねしたり、笑顔で反応したりと自然なコミュニケーションの姿が見られた。「友達の好きなものを知るのが楽しい」「もっと話したい」という声が多く聞かれた。

授業の最後に設けた調整タイムでは、児童がワークシートに「言えたこと」「もう一度言いたいこと」をふり返って記入した。「I like blue. は言えたけど、What color do you like? がむずかしかった」「次はandを使って言いたい」などの振り返りが多く見られた。また、隣の友達とシートを見せ合いながら、「次はこう言ってみよう!」と自分の課題を共有する姿も見られた。この時間が、児童一人ひとりが自分の学びを意識し、次に向けて調整する場となった。

(2) 手立て2：当該児童の意欲を喚起する働き掛け

①自己決定を促す「選択カード」

「自力タイム」において児童一人ひとりに選択カードを配付し、裏面には発話すべき色の表現を提示した。英語に苦手意識を持つA児は、従来の「自分で自由に決める」という指示では思考が停止していたが、カード

の提示により発話すべき内容を迷わずに自己決定できるようになった。A児はすぐに自分の好きな色（red）に印をつけ、発話の見通しを得たことで、自信をもち始め、手応えを感じていた。

②主体的な意欲を喚起するための「赤白帽子」の活用（協働タイム）

「協働タイム」において、児童に赤白帽子を配付し、「帽子なし（自信なし）」「白帽子（少しできる）」「赤帽子（得意）」の3段階で状態を可視化させた。まずは同じ色同士の関わりをもたせた。そこでは、帽子なし同士が何とか自分たちで自己決定する姿が見られた。

③「赤白帽子」の活用を段階的に変化させる（自力タイム→協働タイム）

次に、異なる色同士の関わりをもたせた。B児（白帽子）とC児（赤帽子）はペアになり、C児は躊躇するB児より先に「I like red.」と発話をするのでお手本を示した。B児は安心して「I like red.」と英語で発話できた。赤白帽子が支援の在り方を可視化することで、苦手意識をもつ児童に自信を与えるという効果を示している。

さらに「同色の友達（安心）」→「赤帽子の友達（支援）」→「ランダムな友達（チャレンジ）」というスモールステップで実施した。D児（白帽子）は、まず同じ白帽子の仲間と何度も安心して練習を重ねた後、赤帽子とのペアで成功体験を得た。最終的な「ランダムな友達との交流」の場面では、自信をもって笑顔で友達に話しかける姿が見られ、無理なく段階的に活動の範囲を広げる手立てが苦手意識の克服に貢献した。

(3) 実践1の成果と課題

成果：・個別に学ぶ安心感が生まれた（自力タイムの定着）

- ・「I like …」を中心に、言いたいことを伝える楽しさを感じ始めた。
- ・「協働タイム」での発話が活性化（赤白帽子などで支え合いが見られた）

課題：・「協働タイム」が「情報交換」レベルに留まり、互いの学びを補完する関係性には至らなかった。

→個別で考えた内容を協働の中で使う必然性を明確に設定する。

- ・積極的に助け合う児童がいる一方、消極的で受け身のまま終わる児童もいて、「協働的な学び」がまだ全員には浸透していない。

→「協働シート」の導入や役割分担の明確化で、全員が関われる構造をつくる。

◆ 実践2：第3学年 Let's try! 2 Unit5 「What do you like?」

- 単元のねらい：好きなものについて、友達の好きなものを尋ねたり、伝え合ったりする活動を通して、協働することの楽しさを味わうことができる。
- 単元で扱う言語活動
 - ◆言語活動①（2時間目）：自分の好きなものを正確に伝える活動既習の「I like ~.」を応用し、複数の食べ物・スポーツ等から自分の好きなものを決め、英語で伝える。
 - ◆言語活動②（3時間目）：友達の好きなものを尋ね、情報を収集する。「What ○○do you like?」を活用し、ランキングのデータを集めるという目的をもって友達に尋ね、聞き取る。

<具体的なやりとり>

A: What food do you like?

B: I like curry rice!

A: Thank you!

(1) 手立て1：個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図る「単元デザイン」

1時間目	一斉学習で表現を導入 (I like / What do you like?)	
2時間目	個別学習で自分の好みをカードに書く (自力タイム)	目指す言語活動例：① (個別最適な準備)
3時間目	好きなものについて質問・情報収集・課題解決する活動 (協働タイム) 協働シート使用	目指す言語活動例：② (往還の実践と深化)
4時間目	友達とのやりとりを振り返る (調整タイム)	(協働の深化/自己調整)

実践2 Unit 5「What do you like?」

この単元では、前単元でのふり返りを生かし、「自分や友達の“好き”を尋ね合い、伝え合う」活動へと発展させた。児童が友達とのやり取りを通して英語表現を広げることがをねらい、そのために「協働シート」を活用した。このシートは、友達の発話を書き留めたり、似ている点・違う点に気づいたりするための記録用紙である。シートに記入しながら交流することで、児童一人ひとりの関わりがより具体的になった。活動では、児童がシートを手に教室内を回りながら、「What food do you like?」「I like curry.」「I like curry and ramen.」などのやり取りを行った。

児童は友達の言葉を聞き取り、記録した後、「同じだね」「〇〇さんはすしが好きなんだ」と反応するなど、相手意識をもったコミュニケーションが生まれた。

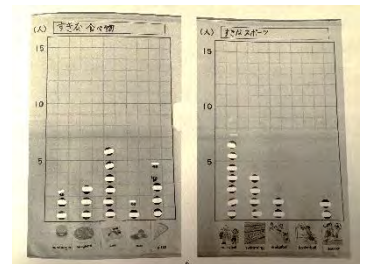
特に、実践①で「長く言いたい」とふり返っていた児童が、「I like sushi and soba.」と自分から発話した姿が印象的だった。その後の調整タイムでは、「友達と話すのが楽しかった」「andを使えた」「次は質問をしてみたい」といったふり返りが多く見られた。協働シートによって、児童が他者の言葉に学び、自分の学びを更新していく姿が見られた。

(2) 手立て2：当該児童の意欲を喚起する働き掛け

④活動の『見える化』：『協働シート』の導入

「協働タイム」で、「クラスの好きな〇〇ランキングをつくろう」というゴールを設定し、グループごとに「協働シート」という大きな紙を導入した。→インタビュー活動は、「ランキングデータの材料集め」という明確な目的をもったことで、児童の聞く意欲が劇的に向上した。これは、児童がこのインタビューで得た情報が、ランキングという最終ゴール達成のために「必要不可欠な材料である」と「目的の必然性」を認識したためである。

そして児童たちは「協働シート」を中心に集まり、形式的なやりとりを脱して、情報の整理と議論を始めた。これは、シート上の進捗状況や不足している情報が可視化されたことで、児童が「今、何を集めて、あと何が足りないか」を論理的に思考できるようになり、課題解決に必要な対話へと意識が転換したためである。



(3) 実践2の成果と課題

- 成果：
- ・協働シートの導入が「何のために協働するのか」という必然性を創出した。
 - ・特別支援の児童を含めた全員に貢献の場を提供し、学級全体のコミュニケーション意欲が向上した。

課題：

- ・「どうして言えたのか」「どんな支えがあったのか」といった自己調整の視点に立った記述はまだ一部。

→「次はどんな言い方をしたい?」「誰の発表が印象に残った?」といった教師のリフレクションコメントで、児童の思考を引き出す。

4 本実践の成果と課題

【成果】

- ・「自力⇔協働→調整」という明確な学習サイクルを単元全体に位置付けたことで、児童が自分の学びの過程を意識しながら、自信をもって学習に取り組む姿が見られた。
- ・赤白帽子や協働シートなどの具体的な手立てにより、支え合いの文化が生まれ、特に英語に苦手意識をもつ児童も積極的に活動に参加するようになった。
- ・「言いたい」「伝えたい」という意欲が高まり、協働の中で互いの表現を取り入れ合い、英語を使って「つながる喜び」を実感する姿が見られた。

【課題】

- ・個別での学びが協働へ、また協働から調整へと活動が繋がらない児童もおり、各タイム間の往還を意識化する支援の必要がある。
- ・ふりかえり（調整タイム）が感想中心となり、自己調整的な省察にはまだ課題が残る。

5. 参考文献

- ・文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動 外国語 編
- ・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す 個別最適な学びと 協働的な学びの実現～（答申）中教審
- ・大場浩正 編著 「外国語教育の研究」ミネルヴァ書房
- ・菅 正隆 編著 「英語授業の「個別最適な学び」と「協働的な学び」 小・中学校の授業アイデア36」
- ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』 文部科学省